

ガラテヤ書2章19-20節 「内に生きておられるキリスト」

1A 十字架につけられた私 19

1B 律法に対する死

2B キリストと共の死

2A 生きているキリスト 20

1B 生きていない私

2B 肉において生きている私

1C 御子を信じる信仰

2C 愛し、ご自分を与えられた方

本文

ガラテヤ書2章を開いてください。私たちの聖書通読の学び、ガラテヤ書1章まで来ましたが、午後に2章全体を一節ずつ見ていきます。今朝は、19-20節に注目します。「¹⁹しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。²⁰もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」

今朝、私たちが学ぶのは、単純に二つのことです。一つは、「自分は死んでいる」ということ。もう一つは、「キリストが生きている」ということです。この二つが一對になっています。自分が生きれば、キリストが私の内で生きて働いてくださりません。自分が死んでいれば、生きて働いてくださいます。自分が死んでキリストが生きてくださるか、自分が生きて、生きたキリストを自分から締め出してしまうかの、どちらかなのです。電車で優先席があって、そこに座っていて、ご高齢の方がやって来ました。自分が座っていれば、その方は立ったままです。自分が譲れば、ご高齢の方が座ることができます。同じように、自分が生きていれば、心の席に自分が座っています。自分が死ねば、心の席にキリストが座ることができます。この二択です。

けれども、私たちには肉があります。肉とは、言い換えますと、「自分で生きて行こうとする意志」と言えるでしょう。人は、キリストを信じた時点で、新しく造られました。霊が、神の御霊によって新たに生まれ、心と思いが一新されます。けれども、からだには、信じる前から持っている、生まれながら持っている力があります。その力で生きていこうとします。ですから、肉という聖書に出てくる言葉は、信じる前の人には使われません。信じる前には、自分の力で生きていくことは、当たり前なことであり、そうするしかなかったのです。自分の心に自分自身が王座を占めて、自分で人生のかじ取りをしています。ですから、それを敢えて肉と呼ばないのです。肉と呼ばれるのは、信仰に

よって、御霊によって新しく生まれたからこそ、その導きに反抗する、私たちのからだに残っている、自分自身の意志、強い力を言うからです。この肉が、復活のからだに変えられる時にはなくなりませぬ。栄光のからだに変えられる時に、変えられるのです。しかし、それまでの間、御霊に導かれる生活の中に、それを「いやだ！」と言って、わがままな子供のように、言うことを聞かない肉があるのです。その葛藤の中で、私たちは生きています。

では、肉に打ち勝つにはどうすればよいのでしょうか？肉に対して、肉で対抗しようとするのが、私たちの常です。つまり、肉の欲望が出て来れば、それをしないように努力します。そこで、いろいろな規則や掟が出てきます。これをする、あれをしないと決めて、努力します。けれども、それを行えば行こうほど、かえって、その憎んでいることを行っているという自分を発見します。ロマ書 7 章で、パウロがその葛藤を話していますね。肉に対して、肉で対抗してしまうことに対して、福音では、「いや、信仰によって対抗しなさい」と教えます。信仰によって救われたのだから、信仰によって生きるのです。私たちは、罪あるのに、それでも、キリストが死なれたことによって、この方を信じることによって、義とみなされています。だからこそ、義の宿る天に入ることができると確信しています。同じように、今の自分も、どんなに肉の抵抗が強くあっても、今の自分は死んでいるとみなすのです。この、みなす、という信仰の行為がとても大切になります。それが今朝の箇所であります。

1A 十字架につけられた私 19

1B 律法に対する死

パウロは、まず、「しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。」と言いました。律法によって、律法に死にましたというのは、律法を行うことによって、生きようとする生き方から死にましたということです。あるいは、律法を行うことによって神に対して生きるという生き方には、おさらばしている、ということです。関係を断っている、ということが、ここでは「死んでいる」と言っています。律法を知っていて、律法を行おうとした人々で、パウロは第一人者でした。その彼が、自分はことごとく律法に違反しており、それで、自分は違反者に定められているように、死ななければいけないことを知りました。

しかし、それが「神に生きるため」の道だったのです。自分が自分の力で生きることをしている限り、神はそこでは生きて働いて下さらない、と言いましたね。その力で生きようとする中で、律法はしばしば利用されます。これこれをすれば、こうなるのだから、という命令がありますから、肉によって生きるのには都合がいいのです。しかし、それがうまく行かず、自分のうちでもがいています。自分のうちには、何も良いところがなく、自分自身に絶望する時に、その時に神はようやく、私たちを引き上げることができます。神は、それを待っていると言ってよいでしょう。ちょうどそれは、川や海で溺れている人を助けるライフガードの人のようなものです。溺れている人がもがいているならば、自分が助けても、もがいているので自分も溺れてしまいます。したがって、少し待たないといけません。自分で自分を救おうとする試みをあきらめた時に、初めて助けることができます。した

がって、神に生きるには、律法に対して自分が死んでいるということをまず知る必要があるのです。「生きるために、死ぬ」のです。

「生きるために、死ぬ？そんなこと、できるわけないじゃん！」と思われるかもしれませんが。けれども、これはまさに、イエス様が言われた言葉なんです。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」自分の証しなので、他の人には必ずしも当てはまりませんが、私が救われる前は、抑うつ状態でした。自殺願望もありました。イエス様を信じて、一年ぐらいはそんな思いが残っていました。詩篇を読んで、魂をもって神にぶち当たっているダビデの姿を見て、癒されたりもしました。けれども、ある時に、こう祈ったのです。自分を直そうとする試みを主にあってあきらめたのです。「主よ、私はこんな、かすのような人間です。けれども、このかすのような私を、あなたにお献上します。」直すのをあきらめて、そのままを献げることを決めたら、治ったのです！イエス様とその福音のために、自分のいのちについてあきらめたら、主がそれを救ってくださいました。

ところで、「死ぬ」という言葉を使うと、これまた、「死なないといけない」として、肉を生かす人がいます！「死ななければいけないのなら、死ぬように努力しないといけないのだ。」として、修行のようにとらえる人がいます。それは、まさに生かしている行為なのです！死ぬというのは、主にあって、あきらめることです。主ご自身に、この惨めな自分を差し出すことです。主に支配していただくことです。信仰によって、自分は主のものであると決めることです。

2B キリストと共の死

そして、パウロはさらに「私はキリストとともに十字架につけられました。」と言っています。ただ死ぬだけでなく、十字架につけられて死ぬのだということです。自分自身を見る時に、そう見ていけないといけないということです。いろいろな死に方がありますが、十字架の死というのは、それが激しい痛みをとまなう、ということに限りません。ローマに逆らうものなら、こうなるのだという見せしめの意味がとて強いのです。自分がローマに反抗するならば、どんなことがあっても屈服させる、という意味合いが強いのです。ローマに服従せしめるための道具です。

私たちの肉は、同じように屈服しないといけません。私たちはどうしても、あがいて、もがくのです。それで、十字架の上で徐々に自分の生きようとする力がそがれていくように、私たちも、その力がそがれて、死に絶えていけないといけないということです。ですから、自分はすでに死んでいる、とみなすだけでなく、十字架に付けられている、つまり、醜い肉はどんなことがあっても死にゆく定めにあるとみなすのです。

ここで、私たちがキリスト者と呼ばれている、そもそもの理由を振り返りましょう。「キリストにある者」と言ったらようでしょう。元々は、「キリストのようだ」というものです。アンティオキアの教会で、

周囲の人々が使い始めました。小さなキリストだ、というような意味です。それだけ、イエス様に真似て生きようとしていたのです。

このことを、「キリストに結ばれた者」と言い換えることができます。妻が夫に結ばれるように、キリストに結ばれ、一つにされたのだということです。パウロがロマ7章で、私たちが古い夫である律法に対しては死んでいて、新しい夫であるキリストに結ばれたのだという話をしています。そしてこう言っています。「7:4 ですから、私の兄弟たちよ。あなたがたもキリストのからだを通して、律法に対して死んでいるのです。それは、あなたがたがほかの方、すなわち死者の中からよみがえった方のものとなり、こうして私たちが神のために実を結ぶようになるためです。」ですから、キリストの十字架にも私たちは結ばれています。キリストとともに十字架につけられました。そして、キリストのよみがえりにも結ばれています。キリストがよみがえられたように、私たちも新しいいのちにあって、よみがえりました。それを水の中に入ることによって公に示すのが、バプテスマです。

私たちは、ですからキリストとの関係が大事になったのです。キリスト者とは、何かこれを行う、あれを行うという定義で考えていたらおしまい、キリストに結ばれた者として、この方を知ること自体が目的になっています。そして、この方を知っていれば、自然に、良い行いが伴います。コロサイ書でパウロが、こう言いました。「3:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」自分については、すでに死んでいるのです。だから、北斗の拳のケンシロウの言葉は、とても意味深なのです！（笑）「お前は、もう死んでいる。」でも、死ぬのは、生きるためであり、自分のいのちは、キリストとともに神のうちに隠されている、とあります。これを経験するのが、20節以降に書かれていることです。

2A 生きているキリスト 20

そしてパウロは、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」と言っています。これは、復活の信仰です。よみがえられたキリストが、私の内に生きておられるから、今の私は生きている、という信仰です。

1B 生きていない私

パウロは、再び、「もはや私が生きているのでは」ないと言っていますね。自分自身に対しては死んでいるからこそ、よみがえられたキリストが私の内に生きます。よみがえりは、死んだからよみがえりだということです。福音というのは、キリストが私たちの罪のために死なれて、葬られて、三日目によみがえられたというものです。が、「葬られた」というのが大事です。確実に死んでいる、ということです。主がよみがえられたのは、いわゆる蘇生ではありません。死んでいたように見えて、生き返ったわけではありません。確実に死んだのです。葬られて、それで死が確実なものとなったのです。そして、神がキリストをよみがえらせました。

日本には、復活の信仰はありません。その反対に、「肉体は朽ちても、霊魂は生き続ける」という信仰があります。ですから、霊魂はさまよい、あるいは他の肉体に移って生きるのだ、とします。日本の映画には、他の人の体に死んだ人の霊魂が移って、生き続けるものが非常に多いですね。これは、復活の否定なのです。死に直面しても、それでも死んでいないのだと思いたいの、霊魂がさまようと思ってしまうのです。死ぬというのは、本当に今までの自分自身を全否定してしまうほどの衝撃です。しかし、キリストが死なれた、十字架の上で死なれたということを見上げる時、私たちは、自分たちが罪人であることを圧倒的に知らされ、自分自身がそこで死ぬことができます。

このことがあって、初めて、「**キリストが私のうちに生きておられる**」であります。この方が内に生きておられること、これほどのすぐれた福音はありません！パウロは、コロサイ書でこのことを「栄光の望み」と呼びました。「コロ 1:27 この奥義が異邦人の間でどれほど栄光に富んだものであるか、神は聖徒たちに知らせたいと思われました。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」天地万物を造られた神が、キリストにあって現れてくださいました。そして、父とキリストが、聖霊によって私たちのうちに生きておられるというすごいことです。一昨日、バイブルカフェで、初めての方に、天地、宇宙を創られた方が父なる神となったださる、この方に個人的に愛されている、そしてこの方が内に生きておられるのです。

2B 肉において生きている私

そこで、さらに本質に進みます。「**今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。**」

1C 御子を信じる信仰

今、現に肉において私たちは生きています。そのいのちが、どのようにして保たれているのか？ということなのです。肉において生きているので、私たちは、その力によって生きなければいけないと感じてしまうのです。それが、イエス様を信じていても、肉によって完成させようとしてしまう過ちを犯す原因となっています。先週の進藤さんのメッセージでも、「イエスを信じていても、過去のものが癒されずに生きている人々がいる。」と言っていました。信じているのですが、肉にいつも反応してしまうのです。では、肉において生きているいのちを、どうすればよいのか？と考えます。

それは、「**神の御子に対する信仰による**」とあります。これは、いわば二輪の自転車のようなものです。二輪なので、立っていれば倒れてしまいます。そこで、幼子は補助輪を付けるわけです。けれども、それでは自転車を動かすのは、非常に邪魔になることを私たちは知っています。二輪の自転車を乗りこなす方法は、前に進むことです。そして、バランスを取ることですね。これと、信仰は似ています。私たちは、神の御子を信じていくことによって、今の肉のいのちを生きていくのです。すべてにおいて、この方を信じて生きます。今の自分は、どうやって生きればいいのか？と思いませんね。イエス様に頼るのです。日々、いや、一瞬一瞬、イエス様に頼るのです。自転車をこいでい

くことで、倒れないでいることができます。前に進むことが、唯一、倒れない方法なのです。私たちは、二輪しかないのを見て、慌てるのです。「こんなんじゃ、クリスチャンやっていけない。」と言ってしまいます。人を赦したいけれども、そんなことできない！となるのです。しかし、この方を信じるのです。信じていると、御霊が働いて、自分ではない違う思いが、神からの思いが与えられます。そうやって、自分の肉のいのちを支えています。

2C 愛し、ご自分を与えられた方

そして、御子を信じるといっても、どのような御子を信じているのでしょうか？「私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった」と言っています。パウロは、自分個人、「私を愛し」と言っています。大勢いる中で自分ではなく、この私個人を愛しておられるということです。この方を信じるのですが、この方に愛されているというところから、信仰が生まれます。愛されていることがなければ、相手を信頼することはできません。信頼できないと、その方に命じられることを聞いて、従うことができません。すべては、愛されているところから始まるのです。

そして、その愛はどのようにして示されたのか？「私のためにご自分を与えてくださった」とあります。ここでも、パウロ個人に対してですね、「私のために」と言っています。イエス様が生まれ、30歳頃に公生涯を送られましたが、そのすべてを、ご自身を与えてくださいました。そして、最後には、ご自身のいのちのそのものを、罪の赦し、清めのために献げてくださいました。

この方に信頼を置くのです。愛して、ご自分を与えられた御子を信じる時に、私たちも愛し、自分自身を神に、また他者のために献げていくようになります。